

## エドワード・ゴーリーを巡る旅

渋谷区立松濤美術館(松濤2) 23.04.08~06.11(会期中展示替えあり)



「エドワード・ゴーリー」(1925~2000)は、不思議な世界観とモノトーンの緻密な線描で、世界的に熱狂的なファンを持つ絵本作家で、近年、日本でも異色の絵本作家として「うろんな客」「不幸な子供」などの絵本が次々と紹介されている。

「ゴーリー」は、自身がテキストとイラストの両方を手がけた主著(Primary Books)以外にも、挿絵、舞台と衣装のデザイン、さらに演劇やバレエのポスターなどに多彩な才能を発揮している。

本展は、不気味でナンセンスに優雅なユーモアが余韻となり、時には不安な気持ちとなる。

そんな作家の終わりの棲家に作られた記念館

「ゴーリーハウス」で開催されてきた企画展から、「子供」「不思議な生き物」「舞台芸術」などのテーマを軸に「約250点」の作品で再構成されている。

米国東海岸に残る古い邸宅へと旅するように、達観したクールな死生観を持つ謎めいた作品との邂逅(かいこう:めぐりあい)を楽しむことができる。

エドワード・ゴーリー《うろんな客》原画 1957年 ペン、インク、紙 上図



エドワード・ゴーリー《不幸な子供》原画 1961年 紙にペンとインク 左

画伯は、幼児や子どもが主人公となる作品をいくつも手がけているが、一見すると悪い子には報いがあると説く教訓をして、ハッピーエンドや勧善懲悪もないのが「ゴーリー」の独特さで、良い子も悪い子も関係なく、あっけなく死んだり不幸に終わる。そんなクールな視点は多くのファンを魅了してきた。

エドワード・ゴーリー《ジャンプリーズ》原画 1968年紙にペンとインク 右